

令和6年度 第3回豊田市生涯学習審議会 会議録

- 日時 令和7年2月17日(月) 午前10時00分～正午
- 場所 豊田市役所 南庁舎73委員会室
- 出席者 [豊田市生涯学習審議会委員](敬称略 50音順)
 - 石川陽子(市民公募)
 - 太田幹夫(豊田市区長会 理事)
 - 木浦幸加(ユカキカク 代表)
 - 田島真実(イトノワ 代表)
 - 西山佳孝(公民館のしあさってプロジェクト コアメンバー)
 - 前田博子(豊田工業高等専門学校建築学科 准教授)【副A委員】
 - 牧野 篤(東京大学大学院教育学研究科 教授)【A委員】
 - 元持千恵子(市民公募)
 - 吉村迅翔(一般社団法人JUNTOS 代表理事)
 - 米山哲司(特定非営利活動法人Mブリッジ 代表理事)
- 事務局
 - 八木健次(生涯活躍部 部長)
 - 曾我史人(生涯活躍部 副部長)
 - 小澤真里(市民活躍支援課 課長)
 - 長島奈緒(市民活躍支援課 副課長)
 - 堀田真悟(市民活躍支援課 担当長)
 - 渡邊洋一(市民活躍支援課 主査)

次第

- 1 開会・あいさつ
- 2 協 議
 - 交流館のあり方と方策(最終案)
- 3 閉 会

第3回生涯学習審議会 会議録

協 議

交流館のあり方と方策（最終案）

事務局（市民活躍支援課）

資料に基づいて説明

A 委員

事務局の説明内容について、意見・質問があればご自由に発言ください。最終案には、過去2回で議論いただいたことが反映されていますが、ご意見いかがでしょうか。

B 委員

交流館の方向性のベースとなる9次総合計画の取組方針として「こどものミライに夢と希望をつくる」とある。具体的にどのような狙いがあるか。こどもたちの多様な生き方や暮らし方は、こどもだけで選択できるものなのか。大人も含めた周囲の関わりについては、どのように想定されているか。

事務局

9次総合計画は、「こども起点」を大事な視点として中心に据えつつ、大人たちが関わりながら一緒にミライを育むことを大切なコンセプトにしている。

こどもたちとの交流や活動を通して、大人も生きがいや役割を得ていく。そのような関わりを想定している。

A 委員

こども起点は、こどものためだけにやりなさい、こどものことのみを考えなさいということではない。こどもの目線に立ったときに今の社会がどう見えるか、そのような社会で大人が自身の在り方やミライをどのように考え選択するかということも含め、こども起点として表現されている。今のこどもたちが好き勝手に生きなさいという意味ではないことを総合計画策定にも関わった身として補足しておく。

B 委員

地域の現状として、中高生までは地元にいるが、社会人になる段階で地元を離れてしまう者が多い。地元を想ってくれているか心配である。

A 委員

こどもを地域で一生懸命育てても出て行ってしまう、帰ってこないのではないかという心配ですね。この点について、いかがでしょうか。

C 委員

自身は保見地区で地域づくりの活動を行っている。保見地区には海外にルーツをもつこどもたちが多く、自分のふるさとや将来について固い地面がないこどもたちがいる。しかしながら、活動を通じて、こどもたちが周りの大人や同世代の仲間と出会い関わることで、いつでも戻って来られる居場所があるという安心感を得たり、将来への希望を見出すことができたりしている様子を目にしている。

いつかブラジルに帰るから地域住民でないのかといったらそういう事ではない。ふるさとの考え方は様々だと思う。国籍や障がいの有無等に関係なく、住民同士がフラットな関係で地域のことを考えること、同じ時間を共有することで、自分なりのふるさとへの愛着が育まれていくのではないかな。

D 委員

自身は若者のキャリアカウンセリングを行う中で、地元に戻らなくても、地元の経験を活かして社会で活躍する若者が多くいると感じている。こどもの頃の地域での関わりが人間形成に役立つのではないかな。こどもの時にいかに地域活動につながりを持つかという事は大切だと思う。

その他、事務局への質問として、9次総合計画策定の際にこども会議で意見を聞いているか。反映しているかをお聞きしたい。

事務局

こども会議に意見を聞いている。その他、こども会議とは別に、大学生などにも意見を聞いている。

A 委員

策定に関わった者として補足する。すべてではないが、こどもたち、若者の意見を聞こうとヒアリングをしてきている。意見は反映されている。

E 委員

豊田市は子育てしやすいまちランキングで東海 1 位であり、子育て支援に厚いまちとして認識されている。行政としても日本一を目指しているということだが、市外県外から来た人にも子育てしやすいまちとして認識してもらい、人口を増やす取組が出来たらよいと思っている。

F 委員

交流館に関する現状調査アンケートの中で、交流館を利用しなかった理由として、交通の便が悪いと回答した方が一定数いる。時間がない、やりたいことがないのかもしれないが、交通の便が悪いことも利用の有無にかなり影響しているのではないか。交流館の利用を進めていく中で、交通についても考えながら進めて行く事が大切だと思う。

A 委員

回答は地域による差異が見られるか、例えば山間地域の回答が多いとか、もう少し詳しくわかるか。

事務局

詳細データを確認する。

B 委員

平成 30 年以降も人口が減少している地域と増加している地域がある。人口の増減や交通の利便性をふまえた利用の評価ができるとよい。

事務局

交通の便が良く、居住人数が多い館は利用者数が伸びやすい。委員ご指摘のとおり、複合的な視点でとらえていく必要がある。

A 委員

地区を超えた利用もあるという話もあった。利用のあり方の議論について、利用者が多ければいいのか、施設に人を集めることがよいのかという議論もある。地区にある色んな施設に出向く、活用するといった活動のあり方も含めて議論ができるとよい。

G 委員

交流館の方策と推進の仕組みについて、今後どのように現場で運用していくかが課題であると認識している。私は公益財団をはじめ公益的組織の研修に携わる機会があるのだが、公益的組織に勤める職員の早期離職が今課題となっている。色んな要素や時代性があると思うが、公益的組織に勤める方々がイキイキと働きがいを感じられるよう、何を以て取組を評価するのか、何をしたいのか迷わない現場での運用が問われている。

良い方針、理念ができて、上手く進んでいかないということは他の組織でも大いにある。今回のとりまとめに書いてあることは十分に理解できるが、現場の方が見て、どういう風に日々の業務に入れ込んでいこうか、推進普及していこうかという時に、迷わないだろうかということが気になった。

具体的にどこで感じたかという、本文の 34 ページ「楽しい講座は多いが、地域課題の解決をテーマにすると参加者が集まらない」という意見。公益的な講座の意義が共有されているか、講座を実施したことに対する評価がなされず、何に力を入れていいのか職員のみなさんが迷われているのではないかと思った。また、営利団体の利用を緩和して利用が増えたことは良いことだと思うが、増えた後の、交流という意味での効果について評価されているかということも気になった。

評価されないと士気も高まらない。また、上司が受容する力がないと現場で混乱が始まる。評価はやっぱり数なのねということになると、人気のあるものを目指すことになり、やりにくくなる。

ぜひ、現場のみなさんがいきいきと取り組むことができるような評価指標、上司力、受容力を意識していただきたい。そのためにも、この方針をみなさんでよくよく解釈して共有できる場を置いていただけるとよい。

A 委員

評価のあり方については、あちこちで問題になっている。人数などの成果指標は作りやすいが、上手くいかないという事もわかってきている。豊田市の総合計画では状態指標を用いた整理がなされているが、多くの公共では目標設定をするより方向性のみが示されることが多く、評価しにくいということが起きている。評価によって自己肯定感や職員のモチベーションを高めるという議論は非常に難しい。委員のご経験から何か提案があれば教えていただけますか。

G 委員

現場の方と方針をつくる方の間で認識を共有することが大切。年代の差や

価値観の差もある。また、丁寧に市民へアンケートをとってニーズを反映していくのは素晴らしいが、そこに注力しすぎると甘えん坊の市民をつくる可能性がある。最終的に市民の主体性に向かっているのかという根本のところを、組織のマネジメントクラスの方と現場の方と共有し、心理的安全性を意識しながら丁寧に推進していくことができるという。

A 委員

私たちも経験があるが、行政がサービスを提供し、住民を消費者にしてしまうと苦しくなる。住民を支える、伴走支援をするのがよいことが分かっている。住民が行政に依存するようになると、お互いが苦しくなるということが経験的に分かっている。大切なのは、研修や議論を重ねて、方向性を確認しながら歩いていくということではないか。

G 委員

私自身も地元で指定管理を受託しており、コスト削減とサービス向上を求められている。コスト削減はわかりやすいが、サービス向上のサービスとは何を指すのかについてはとらえ方に差があり、共有することが大切である。問いを深めていく過程で、28館の個性やオリジナリティが出て、独自性の発揮につながっていくと考える。サービス向上のサービスとは何なのか、今回審議のタイミングをとらえて、深めていく場が必要だと思う。

A 委員

サービスというと、一般的には行政がして差し上げるというイメージがあるが、そうではない。住民のニーズに応じてサービスを提供しすぎると、依存が強まり、肯定感が下がり、要求が昂進していつてしまう。そうではなくて、自分たちでやっていく面白さ、満足度を高めていく伴走支援の仕方が問われている。議論を重ねながらお互いの一致点を見出していくことが必要ではないか。

事例として、北海道東神楽町を紹介する。生活満足度全国一位のまちである。東神楽町では、公民館運営を町内会が行っている。住民が公民館に寄ってはコミュニティの在り方を議論し、自分たちで考えて予算要求をして実現していく。行政負担が減るのに、住民満足度は高まっていくことが起きている。

自分たちでやることの面白さ、つながる楽しさを高めていく仕掛けは大変だが、議論して、検証しながらやっていくしかない。とりまとめを実施していく中では、交流館と住民の方の懇談機会をもつ等して、いろんなつくり方

を考えた方がいいのかなと思う。

D 委員

交流館の役割について、たまり場や居場所としての役割が記載されている。学校現場に関わっていて、こどもの不登校を含め居場所がないという声を聞いている。また、こども同士で集まれる場所をどこかに持ちたいが、小中学生は保護者の許可がないと使えないので交流館は使いにくいなどの声もある。居場所としての交流館について、皆さんの意見を伺いたい。

A 委員

たまり場や居場所としての役割について。どのような考え方、使い方があられると思われるか。こどもの居場所は地域社会にないものなのか。

D 委員

あると思うが、交流館から遠い、簡単に行けない状況もあるのではないかな。委員の皆さんの視点からどういう居場所があるとよいと思っているか。

A 委員

交流館の利用のしやすさに関する問いか。それとも、交流館以外も含めたこどもの居場所に関する問いか。

D 委員

こどもの居場所についてお伺いしたい。豊田市以外も含めて、地域でこどもの居場所としてどういうものがあるのか。

A 委員

利便性ではなく、こどもが利用しやすい空間について、皆様いかがでしょうか。

G 委員

一個人と一つの間という一対一の間を増やしても交流は面白くないと考えている。その点、とりまとめにおけるキャッチコピーは素晴らしい。学び合い、つながり合いの「合う」が素晴らしい。単なる学びは一人でもできるが、お互いで学び合う、つながり合うというところの関係性を育むことが、交流館職員に期待されているコーディネート力だと思う。程よいお世話焼きができる職員がいると、孤独を感じていた方も含めてつながりを感じるこ

ができるのではないか。

事例として、東京に LINE ヤフー株式会社が手掛けるロッジ (Lodge) を紹介する。当施設は単なるコワーキングスペースではなく、人と人をつなぐコンシェルジュ (コーディネーター) がいる。一人で行けば便利な施設というだけだが、その先につなぐ人がいるので行く価値があり、日々新しい可能性やアイデアが生まれている施設である。そのような居場所やたまり場が面白いと思う。

F 委員

交流館の実例ではないが、旭地区の例を紹介する。第 1 回目でも紹介した、旭地区の敷島自治区にしきしまの家という場所がある。旧保育園を地域の住民が手作りでリノベーションした施設である。

しきしまの家の機能として、住民の困りごとを解決する事務所やカフェスペースがある。カフェスペースは、週 1 回の定休日以外は毎日営業しており、夕方まで空いている。しきしまの家の徒歩 2 分くらいの場所に保育園と小学校があり、下校後にこどもや保護者がしきしまの家に集まっている。何で集まってくるかということを考えると、食べ物があることが大きなきっかけになっていると思う。しきしまの家のスペースには、駄菓子設置されており、駄菓子スペースに小学生が集まっている。その他、100 円おにぎりとか、揚げ物とか、アイスクリームとか、小腹がすいたこどもがお小遣いの範囲で買うことができる食べ物が用意してある。こどもたちが食べ物を買って、しきしまの家の前のスペースでたわいのない遊びをする。自然な流れで、たまり場所ができていることに感激した。

山間地では公園も少ないし、広大な地域に点々と人が住んでいる。学校帰りにお友達と遊ぶことが難しい実感がある中で、住民が手づくりで、自分たちの力でやりたいという場所を作ったことで、つながりが育まれているのが素晴らしい。

B 委員

藤岡南交流館の事例も紹介する。藤岡南交流館には、ロビーに机が設置しており、こどもたちが勉強したり、しゃべったりしている。個人的に、もっと静かなところで勉強したらどうかと提案したが、こどもたちにとってはワイワイガヤガヤできる場があることがよいとのこと。たまり場が求められていると感じた。

交流館を利用しているこどもの顔ぶれは近場のこどもが多い。交流館から遠いと学校帰りでは寄ることができていないようだ。交通アクセスの面も含

めて、こどもの居場所について考えていく必要がある。

H 委員

中高生の居場所づくりに携わる立場から、たまり場や居場所の意味についてお話をさせていただく。こどもの居場所は、その場が存在するだけでこどもの声が聞こえてくる、もれてくる場であると考えている。大人が必死に声を拾いに行こうとしなくても、こどもの声が当たり前に存在している場である。こどもの声が自然に落ちてくる場が成り立つためには、どれだけ場が曖昧でいられるか、こどもが何かできるための空白をいかにデザインできるかが大切である。

今年度、こども会議の運営に携わった。新しい総合計画の話もあり、行政職員をはじめ多くの大人がこどもの声を聞こうと会議を訪ねてくれた。また、声を拾うだけではなく、こういう風に受け止めたよとか、今後意見を反映していくプロセスなど、フィードバックも含めての対応があった。これまで活動に携わる中で、こどもの意見を聞かれる場面は増えたが、聞かれっぱなしで声の搾取をされているというのが気になっていたが、今回はフィードバックまでしてくれる姿勢があることが心強かった。

居場所やたまり場があれば、システムとしてこどもの声を拾おうとしなくても、自然に声を拾っていけるはず。居場所やたまり場は、こどもの声を社会に反映させるための大切な場だと思っている。

I 委員

こどもの議論に焦点があたっているが、交流館は地域住民が日常的に利用できる場であるとしたら、大人も含めて、住民の相談を捉えるよりその場として機能できると良いのではないか。利用の雑談の中で、ぽろっと「こういうことがやりたい」などの声が交流館の職員の耳に入る環境があるとよい。交流館職員の役割は、聞こえてきた声を基に、この人とこの講座、この団体つないだら面白そうと発想し、つないでいくことであり、そのようなコーディネートを積み重ねていくことで、各館や地域の特色が発揮されていくのではないか。

また、講座は部屋の中に入ってしまうので敷居が高いと感じている。ふらっと交流館に立ち寄って、好きなドラマの話から日々の介護の話まで出たりするような、こどもも大人も会話がしやすいロビーやカウンターであるとよい。

空間でもないし、講座の運営でもない、どちらでもないところに大切なものがあるのではないかと感じている。具体的な評価はとても難しいことだと

思うが、だからこそ、今回のとりまとめの方向性の中で大切にしていける視点として訴求する必要があるのではないかと。

A 委員

ここまでの議論に共通することは、媒介があることが、人々がつながるきっかけになっているということ。お菓子もその一つ。自身が携わった空き家の活用事業でも、駄菓子が置いてあって、こどもたちが勝手に食べている。お菓子がある、おいしかった、と立ち寄ってくる中で、こどもたちのネットワークができていた。人と人とを結びつける間のものが必要であり、それは設計されすぎているより、曖昧な形で置かれていて、自由に使いこなせるようになっていることが大切。媒介をきっかけに対話が始まり、対話からこぼれ落ちてくるものを拾っていくことができる。

職員もまた、媒介の役割を果たしている。あまり世話を焼かず、そこに存在しているだけでいい。いてくれることによって、その場に行きやすくなったり声をかけやすくなったりする。一言声かけられるくらいの関係の中で、人々がつながっていくことが往々にしてある。

その他、交流館の講座に関して言えば、やりっぱなし、やっておしまいになってしまう状況があるが、本来の社会教育の在り方としては、講座は日々のグループ活動への発展等、人を結びつけるという役割があった。学ぶだけではなく、学び合い。関わりのあり方をどうつくっていくのかという関係性の問題が問われている。講座を通じて出会った人が一緒にまちへ展開していく、そのような展開があるとよい。

場の議論に関しては、つくり方の問題と、その場をどう意味づけていくかという問題がある。意味づけについては、こどもたちの声がこぼれてくる場所、住民の会話から問題が見えてくる場所、様々な捉え方があることをふまえ、空間のあり方や使い方について議論ができるとよい。

C 委員

事務局への質問として、防災上、交流館にどのような役割が求められているのか教えてほしい。防災や減災の分野は、地域の自助に関係する分野である。地域には学校に避難所、自治区に防災倉庫等がある中で、交流館は防災上どのような施設として位置づけられてか。

事務局

本編 8 ページに記載のとおり、市の施設としての位置付けは、防災計画に位置付けられている。交流館は、地区の災害情報等の収集及び伝達拠点をは

じめ災害応急活動等を実施する施設として位置づけている。その他、地域住民が主体的に防災について学び合う機会をもてるように日常的な関係づくりが重要であるとする。

A 委員

防災の分野では、減災や発災後の公助が来る前の共助が大事なテーマとなってくる。各地で防災訓練が行われているが、人が集まらない、飽きてくる、疲れてくるということが起こっている。そのような状況を打開しようと、防災を楽しむことが提唱されはじめている。例えば、阪神淡路大震災で被災された方の声を基につくられた「イザ！カエルキャラバン」という防災体験イベントは、不要になったおもちゃ等のモノを交換し合う中で、楽しみながら防災を学び、人間関係をつくるプログラムとなっている。

防災では、災害が起こったときにすぐに助け合える関係、他者のことを想像できる関係を作っておくことが重要である。日常的に良好な関係を育むという意味では、交流館活動を通じた学び合いやつながり合いは防災にもつながっていくのではないかと。防災というテーマのみで狭く考えるのではなく、日常生活の中で人間関係をどのようにとり結んでいくかを考えることが防災にも役立っていく。

A 委員

その他、とりまとめ案についてのご意見はよかったでしょうか。審議会終了後でも、ご意見があれば事務局までお伝えください。

それでは、本日は最終回ですので、1年間審議会に関わっていただいた感想等を一言ずついただきたいと思う。

H 委員

初めて審議会に参加してみて、社会教育について深く考えることができた機会となった。教育は施されるものという感覚を持っていた自分に気づかされた時間でもあった。

審議を進めていく中で、社会教育は教えられるものではなく、共に育んでいくものであると感じた。教育の「教」は「共」としてもよいのではと思った。社会教育の場、交流館という場は、施される場ではなく、自発的に何かできる場であることが伝わっていくとよい。私の世代は、自治区やPTAにアレルギー反応がある世代で、そういうことをやりたくないために地域の人との関わりを断ちたいと考えてしまう。本来は、そのような活動を通じてお互い様の関係が築けるはずなので、やりたくない思いが先行してしまう考え

方を少しずつ変えてゆきたい。

F 委員

皆さんの多様な意見を聞かせていただき勉強になった。今、公でお役をやるということが、若い世代を中心に拒否反応が出ている時代だと思う。中山間地は人口が少ないため、PTAや消防団等の地域のお役を掛け持ちしている場面もある。やりたくないけど、しぶしぶ、誰もいないからやっているという現状がある。

一方で、そのような状況でも、しきしまの家のように、クラウドファンディング等でお金を集めたりしながら、本来やらなくてもよい場所づくりを、新しいお役を増やしながらやっている現状もある。場所づくりに関わっている人たちがどのようになっているかという、すごく楽しそうにしている。移住者の方も、ずっとカフェがやってみたかったのだと、うれしそうにしている。

交流館での活動においても、地域のみなさんが学び合ったり関わりあったりする過程で、はじめは面倒くさかったことが楽しさに代わる瞬間がどこにあるのだろうということを見つめていくことが、大切なことではないか。

B 委員

交流館は赤ちゃんから高齢者まで、地域住民が集まり、ワイワイできるコミュニケーションを図る場として重要な役割を果たしていると感じている。豊田市の自治を推進するうえで、28地区に万遍なく設置されていることにも意義があると感じている。自治区長の立場として、地域のみなさんの想いを一つにして動いていくことができるよう、今後も積極的に交流館に関わっていきたい。

D 委員

自分は、社会教育士という立場から、交流館や行政とどのように関わっていけるとよいかという視点を持ちながら審議会に参加していた。方策を実践していく中では、時代の変化とのずれや管理者と現場の意識のずれが出てくる場面もあると思うが、その都度目指す姿に立ち返りながら、既存のあり方にとらわれず、新しい可能性に向けてチャレンジする気持ちを忘れずに取り組んでいければと思う。

G 委員

他のまちから豊田市を拝見していて、ポテンシャルが高い素敵なまちだと

思っている。ポテンシャルを最大限発揮できるよう、実際の現場で職員の方が運用できるような環境づくりに取り組んでいただきたい。

自分も社会教育士という立場で、つながりというテーマに向き合っている。つながることは難しいという話をよく聞いているが、つながらないのではなく、つなげていないことが大いにある。どこがボトルネックになっているのかが見えてくると、環境が機能する。つながりにくいのは、国民性やパンデミック、大きな要因があるのかもしれないが、それらを乗り越えていくことができる豊田市だと思っている。今後も期待している。

C 委員

審議会には厳かな場のイメージがあり、はじめは緊張していたが、終わってみれば楽しかったというのが率直な感想。自身は自治区の副区長をやっているが、若者というだけでもてはやしてもらえ、誰かの役に立つ満足感や面白さを人生の早い段階で気づくことができよかったと思っている。自治区活動をはじめ、まちづくりに関わることは面倒くさいと思われがちだが、仲間と一緒にやると楽しいということを、今後こどもたちにたくさん体験してもらいたいと思っている。

来年度、20歳の友人が区長になる。シンプルに物事を楽しむ僕らのような若者と、長く地域に住んで地域課題に向き合ってきた方が一緒に学び合いながら合うことが、まちの魅力を発揮していくことにつながると考えている。これからも頑張っていきたい。

E 委員

多様な考え方に触れることができ、今後の自身の活動にも参考になった。これからは、交流館をただ利用するだけではなく、交流館がどうあるべきかについても考え、考えたことを職員の方と共有しながら活動していきたい。

J 委員

交流館は「館」という冠がついているが故、あり方の議論がハードの話に行きがちだが、館でないところの議論が大切であると思っている。大切なのは、旭地区のしきしまの家と同じ取組みが広がることではなく、市内のあちらこちらで住民主体の活動を担っていくことができる人が増えていくこと。人づくりの場面で、交流館のコーディネート力が試されている。

コーディネートができたこと自体を喜んでいても評価はしづらいもので、評価すべきことでもないのかなと思う。交流館が地域で活動されている方を陰ながらコーディネートすることで支えていけば、自然と楽しいまちになっ

ているのではないか。

I 委員

今回の審議会で一番印象的だったのは、現場で働く交流館職員のみなさんが傍聴されていたことだった。他の審議会では、議論が現場にどのように届くのかが見えない会議が多い中で、この会議は日々現場で取り組んでいる方が聞いている。審議への緊張感と今後への期待感を感じることができた会議だった。

自身は日頃、教授として建築学科に在籍している。空間の果たせる役割は全体からするとわずかであることを痛感している。立派な空間だけでは場の役割は果たせない。空間と人、両方が必要であり、空間と共にどういう人がいるか、空間の中にいる人がどのように取り組んでいるかを考えることの重要性を改めて実感した。

委員の方もバラエティに富んでおり、みなさんの経験を聞けることが楽しかった。一部の地区では20歳の区長が選出されるということで、若者が困っていることがあれば、よし、おばちゃんに任せときみたいな、お互い様の関係性を交流館が関わり受け止めることができたなら素敵だと思う。

A 委員

今回生涯学習審議会で、交流館の在り方や使い方について審議をさせていただいた。多様な委員の方に参加していただき、議論が深まったと感じている。

先ほど、20歳の自治区長が選出されたというお話があったが、自分も感じているのは新しい時代に入ってきたということ。全国では、中高生の自治区役員もいる。現代は、物質的な豊かさと共に成長してきた年配世代が、環境問題をはじめいろんな社会問題で我慢しないといけないことに疲れている。それを若い世代は現状に疑問を持っている。バブルがはじけた後の抑圧的な社会、低調な状況が普通である社会で生まれた若者世代は、環境問題や豊かな暮らしのあり方を考えること自体が面白く、お金儲けや物質的な豊かさに価値観を置いていない。

その意味で、年配世代は、若い世代が出てきているという事を受け止める必要がある。昨日、長野県飯田市で高校生を舞台にあげて議論していた時にも感じたことである。関わっていた高校生たちは大学に進学しても意味がないと言う。こどもたちになぜそんなことを思うのかを聞いていくと、小さな頃から大人に関わってもらい、よい関係が育まれたことで、自己肯定感を持っていることがよくわかる。地元の歴史や文化を教わるのではなく、大人た

ちに身をもって今までの経験を示してもらいながら、自分たちがやることに
対して寄り添ってもらえたことで、自分がこの地域を継ぎたいという思いが
芽生えている。実際に、市役所や地元企業に就職しながら、青年団に入って
活動している若者が相当数いる。

交流館のあり方を考える上でも、こうした時代の変化を認識する必要がある。
過去のようにみんなが同じ方向を向いて生きていく時代ではなく、それ
ぞれが新しい自分の価値観を持ちながら生きていこうとしている、お互いに
認め合う関係性を育もうという社会に入ってきている。そのことを認識し、
時代状況に応じて施設のあり方を変えていく必要がある。

先ほど事例紹介のあった「しきしまの家」のように、すでに場があるのに
自分たちで作ってみたいし、つくことで新しい活動ができてくる、面白く
なるということが地域で起こっている。行政が用意してみんなで同じように
使いましようというより、住民の方が自分の価値観に応じて使いこなしてい
く。使う過程でお互いに認め合える関係性を育み、自分の存在の根っこがあ
ることを実感できる、そのような場が求められているのではないかな。

ふるさととは生まれた場所ではなく、自分にとっての関係性がある場所であ
る。今のこどもたちは、自分を大事にしてくれた人がいる、その人との関わり
がある、自分が位置づけられている場所をふるさとと感じている。地域の
良好な関係をつくることによって、コミュニティの関わり、身近な誰かとの
関わりを自分のふるさととして認識していく、その過程でふるさとへの愛着
が育まれ、今度は自分がふるさとに貢献したいという思いにつながっていく
のではないかな。そのような場所をつくっていくことは、交流館の目指す姿
や、第9次豊田市総合計画のこども起点にもつながっていく。

最近の調査研究では、こどもの頃から大人に関わってもらった子どもは、
利他性が高まり、次の世代に関わりたくなることがわかってきている。この
ことは、人間の本性であり、改めて注目され始めている。

国で教育のあり方を考える中でも、社会教育が人を中心にしたものとして
捉え返されている。交流館も、館という空間ではなく、社会のハブとして人
と人との関係をどう結び付けていくかということが問われている。今回、こ
れらの視点をふまえ審議をすることで、新しい交流館のあり方が垣間見えた
のではないかな。

社会は刻々と変化している。引き続き、日々の交流館での活動や地域住民と
意見を組み交わす中で、時代に応じた交流館の新しい使い方が見出されていく
とよいと思う。

以 上